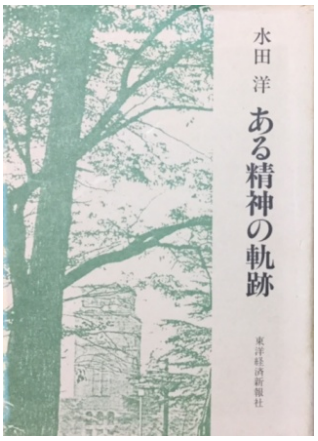
ある精神の軌跡

9 月 4 日に水田洋先生と京都までご一緒したときに、表題の先生「自伝」続編を書いてほしいと「注文」した。

その自伝のことが気になり、『ある精神の軌跡』東洋経済新報社、1978 年を久しぶりに手にとった。ずいぶん前に名古屋本山の古本屋で手に入れ、「V 職業としての学問」、とりわけ水田先生が名古屋大に赴任された頃を集中して読んだ。



今回久しぶりに読み直すと、先生が車中で話されたことが、活字としてよみがえってくるようだった。幼い頃からの先生のあゆみが「ある精神の軌跡」として一本の線で結びつき、戦中から戦後の昭和の歴史、とりわけ大学と学問の歴史を振り返ることができた。

本書「あとがき」から―この本は、東洋経済新報社の『書窓』21―25 号(1975 年 10 月―76 年 10 月)に、「私の学問遍歴」として連載したものに、大幅に加筆してできあがった。　・・・　一研究者の形成過程を描くことによって同時に、同時代史をも素描しようとした、旧稿の意図も、もちろん変わっていない。ただ、「形成過程」は「学問遍歴」の、いわば前半であって、その意味ではこの本は未完である。後半を残したのは、一冊としての手ごろな枚数という制限だけによるのではなく、いろいろな意味で、まだ書くにははやすぎるからである。

いろいろ紹介したいことは多いが、私の「注文」に関わるVの最後のところだけを書いておきたい。これを読むと、「未完」である本書の続編を先生に「注文」したことを考えてしまう。

だれでも、1 日 24 時間のうち、頭脳がすっきりしている(もちろん相対的だが)のは、それほどながくはないのだから、そういう状態を確保するために、十分な休息はつねに必要である。ところが、こうして「ひまさえあれば寝る」ことになると、そのかわりになにかを切りすてなければならない。

きわめて平凡な結論だが、つぎのようなことになるだろう。すなわち、すべてを犠牲にしてしゃにむに勉強したからといって、たいした成果が得られるわけではなく、長期戦の身構え心構えが必要なのだが、しょせんは 1 日 24 時間で数十年の枠のなかのエネルギーの使用方法の問題なのだから、なにかを切りすてなければならない、ということである。

この奇妙な自伝も、切りすてるべきであったのかもしれない。

(2016 年 9 月 18 日)